



平成23年4月28日
川崎市立柿生中学校内
柿生郷土史料館 情報・研究誌
第35号

歴史に学ぶ 関東大震災と柿生・岡上 1923年 9月1日

—— 経験や教訓を生かし心の準備を ——

今年、3月11日の東日本大震災は、その実態がわかるほどにその規模の大きさと被害の大きさが判明し、いかに大変な事であるかということを感じました。

比較的近年の大正12年(1923年)9月1日に発生した関東大震災の時の都筑郡あるいは柿生・岡上村の被害状況について調べてみました。



(川崎区伊勢佐木町の地割れ)

新聞や情報誌によると、鶴見川流域の近隣の村では、例年になく沼や小川の鯰(なまず)の発生がおびただしく、ことに8月31日と9月1日の朝方には簡単にたくさんの鯰を獲ることができたそうです。

また、8月30日から9月1日にかけての3日間、林野では毎朝、続けて雉(き)が激しく鳴いていたため、人々は、地震の前触れではないかと話していたそうです。

さて、地震の状況は、道路や庭、地面に無数の亀裂が生じ、都筑郡だけでも家屋の全焼が3件、全壊・半壊あわせて1136軒、死者91名にのぼったそうです。

・柿生・岡上村のみの被害状況は、右のようになっています。

建物	全壊177件・半壊136件=217540円
道路	破損箇所125箇所= 8100円
橋	栗木の清水橋・片平無名の橋・他=1386円
河川・用水	4箇所(矢本川)= 800円
養蚕業	生繭、桑、機械、他= 21900円
耕地	田、畑、用排水路、耕作道= 7310円
作物	稲、菜類、雑穀、その他= 2109円
林業	山林の壊滅、土窯、その他= 2800円

被害状況をみると、死者、行方不明者の数はよく分かりませんが、建物の被害は、全壊・半壊合計で現在の貨幣価値で換算すると約21億7500万円であり、かなりの被害がでています。

また、都筑郡の他地域に比べると当時の主要産業の養蚕の被害額が大きいという点であるとともに山林被害(土窯は炭焼き窯)に関する被害も大きいようです。「山林の壊滅」は具体的にどういうことなのかはよく分かりませんが炭焼き用の窯(かま)の多くが破壊されたようです。

今や関東大震災級(マグニチュード7.9)の地震発生は時間の問題かもしれません。準備だけはしっかりしておきたいものです。

(参考資料:「神奈川県震災誌」「写真で見る川崎市の100年」他)

(柿生・岡上村の被害状況二上記の金額を1万倍すると、ほぼ現在の金額に近い)

伝承が地域を救う ・仙台「浪分(なみわ)神社」 ・岩手県宮古市の「石碑」

宮城県仙台市若林区霞目に「浪分(なみわ)神社」という少し変わった名前の小さな神社があります。

この神社の建立は江戸時代の元禄15年(1702年)で、元々は別の近くの場所に稻荷神社としてあったそうですが天保6年に現在の場所に移されたそうです。

その理由は、今までの大地震でこの地点まで津波が来たとか、大津波が襲い、この地点で南北に別れて水が引いたのでその場所に神社を設けたとの伝説があります。

そういえば、天保6年6月25日(晴)に三陸、仙台周辺に大地震が発生しており、大津波に襲われたという古い記録があります。(仙台津波といわれる)この大津波をきっかけに現在の位置に移したのでしょうか。

この地域でもっとも古い地震の記録は、貞観11(じょうがん=869年=平安時代初期)年5月26日に起きた陸奥の国大地震に関する事で、詳しいことは、「日本三代実録」(日本の正式の歴史書で清和・陽成・光孝の3天皇の代=858年~887年=の出来事を藤原時平・菅原道真らが編纂した)の中に書かれています。内容は、『夜、震動して光が流れ、光のあたらないところは昼間の影のようである。人々は叫び、伏したまま立ち上がることができなかつた。家はつぶれ、下敷きになった人は死に、あるいは地が裂け、その中に埋まってしまう人もいた。牛や馬は暴れ逃げ出し、城郭や倉庫は潰れ倒壊



(仙台市若林区の「浪分神社」)

する建物は数知れず。続いて押し寄せた津波は平野の奥深くまで侵入して陸奥国府の城下まで達し、千名を越す犠牲者が出た。』という生々しい記録が残されています。

この地域は、昔から地震・津波の被害の多い地域でもあったようです。

一方、最近の新聞にはこんな記事が出ていました。岩手県宮古市姉吉は海岸が全て津波にのみこまれてしまいましたが、全ての住民の家屋が被害を免れました。そこには、『ここより下に家を建てるな』という先祖からのメッセージがあったのです。

この地区は、明治29年(1896年)と昭和8年(1933年)の二度の三陸大津波の被害にあった地域でした。なんと、生存者は二人と四人という壊滅的な被害を受けました。

そこで、昭和8年の津波を受けた後、住民たちが「石碑」を建て、全ての住民が石碑より高い場所で暮らすようになりました。地震当日、大津波警報が発令されますと人々は、丘の上にある我が家めざしてかけのぼりました。後を追う津波は、「石碑」

の手前50メートルの所で止まりました。

この地域の人々は、幼い頃から「石碑の教えを破るな」と言い聞かされてきたそうです。

石碑には、『高き住居は児孫の和楽、想へ惨禍の大津浪』(高い場所にある住居は子孫の幸福のためです。あの津波の悲劇を決して忘れてはいけません)と書かれています。

私たちも、東北の人々の惨状を忘れてはいけません。何かを学んでいかなければいけませんね。(参考資料:「日本地震史料」「日本三代実録」「読売新聞」)



(先人の残してくれた「石碑」=写真は読売新聞3/30朝刊より)

日本人と 鯨 (クジラ) 鯨への厚い「情」と習俗

日本人は決して残酷ではない

『柿生文化』34号では、19世紀、捕鯨大国であるアメリカが日本近海に現われた理由は良質の油にあったということにふれました。

日本では古来から捕鯨が行なわれ、鯨は日本の食文化でもありました。

室町時代の半ば頃には槍や銚(もり)を使った猟が行なわれ、やがて網のついた銚(もり)等が使われるようになりました。江戸時代には日本全国でも捕鯨が行なわれるようになったようです。

確かに、捕鯨は残酷な狩猟方法ですが、だからこそ日本には鯨に対する厚い「情」や「優しさ」の感情がしっかりと根付いてきたのではないのでしょうか。



(和歌山県新宮市の「鯨踊り」)

全国的に『鯨塚』『鯨墓』等が造られ鯨の冥福(めいふく=死後の幸福を祈ること)を祈ったり、鯨に戒名を付けて供養する地域もあります。山口県長門市のように今でも6月29日から3日間観音堂で鯨の冥福を祈る法要(ほうよう=仏教の僧が仏の教えを説き死後の霊を供養すること)が行なわれています。三重県北牟婁郡海山町白浦と尾鷲市梶賀では張りぼての鯨船を造り祭礼が行なわれ、白浦では大般若経が読まれ鯨の供養が行なわれています。一方、鯨を『恵比寿(えびす=漁業の神様で商売繁盛の神)』として信仰する地域も全国各地にみられます。

人間は、動植物などの生きものを食べることによって生命を維持しています。そうしなければ生きていけないということも事実です。言い換えると動植物によって生かされているのかもしれませんが、だからこそ、これらの動植物に感謝しなければならないという感情が生まれてくるのでしょうか。世界の多くの宗教でも説いているところではないのでしょうか。

日本は、周囲が海に囲まれ、鯨は貴重なタンパク源でもありました。それはやがて捕鯨という行為と鯨に対する「情」や「感謝」のへ思いと一体化し全国的にたくさんの習俗が生まれてきたわけです。そして、そんな情感のなかから日本の食文化が確立されてきたわけです。

外国の方も、そんな日本人の優しさと情感の世界をもっと理解してもらいたいものであると同時に、日本人がもっとその思いを世界に発信していくべきではなかということ強く感じております。

約50名の参加者が集う「佐藤英行画伯の 絵を見ながら語る故郷の思い出」4月23日

4月23日(土)柿生郷土史料館でたくさんの参加者のもと、郷土の画家、佐藤英行画伯が自ら描いた10枚の「思い出の故郷」の絵画をもとに語っていただき、さらに故郷の伝説や昔話を渡辺恵子さんに語っていただきました。約2時間の懐かしい思い出のお話に参加者は時の経つのを忘れる思いでした。次回は5月22日です。



第2回 特別企画展 柿生 郷土史料館(☎988-0004)

大好評につき6月まで展示公開を延長

ふるさと

■テーマ 「佐藤英行 西伯が描く 絵で語る故郷の百年展」

■期 日 5月 8日(日)・22日(日)・29日(日)
6月 4日(土)・11日(土)・18日(土)・25日(土)

第4・5回 展示物 ガイドセミナー 柿生 郷土史料館

ふるさと

□テーマ 「佐藤英行 西伯の 絵を見ながら語る吾が故郷」

□期 日 ・5月22日(日)午後1時30分より
・6月18日(土)午後1時30分より

□会 場 柿生郷土史料館展示場

□内 容 特別企画展展示の佐藤西伯の10枚の絵画をもとに郷土 柿生・岡上の思い出の姿をパネルディスカッション形式で語り合う。

柿生郷土史料館開館のご案内

開館時間

開館：午前10時
閉館：午後3時

開館日

5月 8日(日)	加祭(加)	6月4日(土)
5月22日(日)	加祭(加)	6月11日(土)
5月29日(日)	加祭(加)	6月18日(土)
5/29 14時	加祭(加)	6月25日(土)

7月以降の開館予定は「柿生文化」36号(6月18日発行)でお知らせ

※4月5月のガイドツアーやガイドセミナーの予定が右の表のように変更になりました。

(例)※加祭(加)→ガイドセミナーを午前と午後を実施 加祭(加)→見学者全員で館内全体ガイド

カルチャーセミナー案内

第28回 柿生カルチャーセミナー

テーマ 「多摩川流域 地名の謎」

講 師 鈴木 茂子 氏 (日本地名研究所)

日 時 5月29日(日)午後2時～

会 場 柿生郷土史料館(柿生中学校内)

内 容 多摩川をばさんで東京と川崎で同一の地名があります。この謎を解きあがります。鶴見川文化研究のヒントにも

カルチャーセミナー案内

第27回 柿生カルチャーセミナー

※(3/11の大地震によって瓦礫されていた建屋です)

テーマ 「発見された相模川橋脚から わかる歴史的事実」

講 師 大村 浩司 氏 (相模原市教育委員会)

日 時 7月24日(日)午後2時～

会 場 柿生郷土史料館(柿生中学校内)

内 容 郷土の武村、鶴毛三郎が亡き愛妻のために建てた相模川橋脚。建屋期の建築技術や文化財の保護について解説